

狩猟採集民バテツの社会におけるエイジング 呼称と「老い」にかんする語の使用に着目して

河合 文（千葉大学）

現在日本では、特定の基準に従って一律的に認知される「老い」にかんする語と、個々の社会的文脈において認識される「老い」にかんする語が混在している。前者の代表的な例として、社会制度や法律の文面にみられる 65 歳以上の人をさす「高齢者」や「老人」が挙げられる。こうした人々は 1970 年代より「介護」という語の創出とともに、社会福祉の対象として位置づけられてきた（天田ほか 2011）。いっぽう後者の例としては、家族・親族関係における「おじいさん／おばあさん」、地域社会における「お年寄り」が挙げられ、これらは孫の誕生や地域における特定の世代に伴う役割といった、人間関係が実践されるなかで用いられてきた語といえるだろう。

本発表では、半島マレーシアの狩猟採集民バテツの社会における呼称や「エイジング」あるいは「老い」にかんする語の使用に着目し、「年を取ること」（エイジング）について、それが位置づけられる社会構造とともに考察する。

バテツは、マレーシアのオラン・アスリ（先住民）の 1 グループであり、対象とする集団は、雨期は政府が設置した村に留まり、乾期は村を拠点としつつ森でのキャンプを組み合わせて暮らす約 130 人の人びとである。それぞれが何等かの親族関係で繋がっており、テクノニミーを用いて互いを呼び合う。村では政府が支給したコンクリート家屋や、ヤシの葉や竹で作った家を利用する。そしてキャンプ中は、ヤシの葉で作った差し掛け屋根のような開放的なシェルターで寝起きし、狩猟で得た動物を分け合うことも多い。

その時生活していた場所（村や森）で出産する彼らは、太陽暦に基づいて自分の年齢を把握している人はごくわずかである。ライフステージの捉え方も、「子ども」、「結婚適齢期の男性／女性」、「父親／母親」、「祖父／祖母」というように、親族関係が個人の生涯に埋め込まれており、基本的に結婚後が「大人」とされる。

「大人」を表す「バクス」という語は「年を取った」という意味でも使用され、その文脈においては「若い」を表す「ケン」と対義語にある。「ケン」はしばしば手に負えないいたずらをする子どもを表す語として使われるのに対し、「バクス」は、物知りであることを褒められた際に「私は年寄り（バクス）だ」というように使われ、成熟した人というニュアンスが伴う。

「おじいさん（タ）」や「おばあさん（ヤ）」という語の使用にも類似の傾向がみられ、自らのパートナーを「この年を取ったおじいさん／おばあさん（タ／ヤ

バクス タ）」と呼ぶことがあり、これは恥じらいとともに尊敬の念を表していると考えられる。また、普通ならば一人称を用いるような場面において、孫がいないにもかかわらず、子どもの名前を用いて「誰々のおばあさん」と自称する女性（50 代）もいる。「おじいさん」や「おばあさん」という語、ないしその語に伴う社会役割が好ましいとみなされているだけでなく、この語が厳密に親族関係のみを示すものでないことがわかる。

さらに直接的には祖父／祖母の関係にない人であっても、中間の世代が「あなたのおじいさん／おばあさん」と年少者と年長者を結び付けたり、年長者が年少者を「わたしの孫」と呼ぶなど、呼称を通じて積極的な関係構築も行われている。これは「老いた人」のケアのありかたとも関係していると考えられる。

日本では「介護」というケアの対象者としてイメージされがちな「高齢者」であるが、バテツの暮らしでは「ケア」の対象は「お年寄り」や「おじいさん／おばあさん」に限定されない。乳幼児や妊婦、怪我人や病人などがケアされる人であり、年齢は多様である。しかし特定の親族関係に強く位置付けられ母親のケアを中心に受ける子どもとは異なり、「老いた人」は一人で寝起きし、多様な人から日常生活を手助けしてもらう。

自分で家を作ることが難しい「老いた人」は、他の人が使用しなくなり、ほぼ屋根と床だけの開放的な空間となった「家」で寝起きする。こうした人の様子は、誰でも目につき、夜間でも咳の音が聞こえてくるなど、意識せずとも様子が把握される。食べ物や飲み物は近くに暮らす娘が持っていくほか、買い物に出かけた人から菓子などをもらうこともある。また洗濯をしている人に自分の衣類を渡すなど、多様な人が自然と関わることとなり、その人を「おじいさん／おばあさん」と認識する人びとの「ケア」を受けるわけである。

発表ではこのように呼称を手掛かりにバテツの社会における「年を取ること」を考察することで、近年の日本における呼称からみた「老い」をめぐる状況について考える参照点としたい。

文献

天田城介・北村健太郎・堀田義太郎（編）2011『老いを治める：老いをめぐる政策と歴史』生活書院。

キーワード：呼称、「老い」、バテツ、オラン・アスリ、マレーシア